

北京通信 1 (2000.7 『部落』663号)

われわれ四十代半ば以上のものにとって、北京というのは不思議な懐かしさを覚える街だ。といのも、まさに現代日本と同じような光景と、高度成長以前の子供の頃に見ていた光景が同時に観察できるのが、今の北京だからだ。現代化の真っ直中で、自動車が急増し、どこを見ても街中が車、車、車のラッシュ状態。特にチャレード型の小型タクシーが多いのが目につく。そして、排気ガスやスモッグとで街全体の空気が著しく悪化していることを別とすれば、日本よりも道幅の広い道路網が整備され、高層ビルが建ち並んでいる姿は、一見すれば紛れもなく現代都市の姿だ。急増している「商場」と呼ばれるデパートには、高級ブランド製品が溢れ、最新の家電、電子機器も所狭しと並び、多くの人々でごった返している様子は、まるで大阪や京都のデパートにいるのではないかと思うくらいだ。値段も、日本とほとんど変わらないことにも驚かされる。一方、「超市」と呼ばれるスーパーにも、パック詰めされた商品や、インスタント製品、冷凍食品などが並び、味や種類の微妙な差を別とすれば、これまた日本のスーパーと変わらない様相を呈している。

だが、何も無理して探さなくても、それとはまったく別の世界が、こうした<場>の周りを取り囲んでいるのが北京のおもしろいところだ。まず、道路上ではすさまじい自動車の量に負けじと、これまたすさまじい数の自転車と歩行者が、その狭間を行き交っている。両者のコントラストは鮮やかで、信号などの自動車用のルール(?)と争うかの如く、自転車や歩行者は信号を無視して行き交い、さながら交差点は戦争状態だ。ぐすぐすしていると、自由に左折できる自動車が、突進してくる自転車の集団にぶつけられるという感じで、横断歩道は、とにかく決断して走って渡らなければならない状況といってよい。当然ながら、交通事故は日常茶飯事で、こちらへ来て外出した日には、二環路・三環路と呼ばれている環状自動車道とその脇を走る一般道が交錯している箇所では、ほぼ毎日目撃しているといっても過言ではない。考えてみれば、車社会が突然やってきたわけで、自転車族や歩行者にとっては、自動車は迷惑な存在ということなのだろう。

そして、明らかに車社会とは別の、時間がゆっくり流れていく空間が街のあちこちに残っていて、いつ客が来るともしれない物売りが、それこそこんなものまで売ることかという感じで、街頭のあちこちに立って車を見送っている。また、北京内に無数に存在する「単位」と呼ばれる自足的な生活空間には、自由市場と呼ばれる露天商街が必ずといってよいほど存在していて、野菜や果物から日常生活用品に至るまで豊富に並べている。その値段たるや驚くべき安さで、日本円で50円もあれば、袋一杯の野菜が買えてしまう。売り場のおじさんやおばさんは、いずれも昔ながらの素朴な優しさを顔面にたたえている人々で、こちらの下手くそな中国語にも丁寧に応じてくれる。また、休日ともなると、天壇公園など北京市内に点在する広大な公園には、お年寄りから若者までが集い、のんびりとダンスや体操、麻雀に興じている姿を見ることも出来る。そこには、せかされるような工業社会の時間は存在していないかのようである。

だが、こうした懐かしさを感じさせる空間や時間は、早晚街の「裏側」に追いやられるに違いないと、先日上海に行って確信した。北京よりも数歩現代化が進んでいるといつてよい上海では、既にこうした別の空間・時間は、街の「裏側」に追いやられていたからである。だからこそ、今の中国全体をも映し出しているかもしれない、さまざまな錯綜した空間・時間が、未だあからさまに露出している北京には、余計に愛着もわいたのである。

今回は、とりあえず北京滞在一ヶ月余の外見の印象を記してみた次第である。

北京通信 2 (2000.8 『部落』665号)

北京滞在約三ヶ月、北京の人々と、われわれとの生活感覚の違いというものが次第に気になりだした。表面的に言えば、北京の人々は全てに大雑把なのである。例えば、レストランの食器などは完全に綺麗に洗われているものは稀だし、ホテルの掃除にしても隅々まで掃除機を回してきちんと拭いているとは、とてもいえない。新しそうな建物や塗装にしても、近づいてみると荒っぽさが目立つ。出来たばかりの道路の脇には、既に石が落ちてきているありさまで、自動車も洗車などしていないような埃だらけのものがほとんどである。中にはマフラーを針金でくくりつけたようなポンコツ車もよく見かける。バスなどでも突然客をほっぽって、運転手が外に出ていなくなってしまう始末（実はバス後部でエンジンを蹴飛ばして「修理」していたのだが）。スーパーでも、レジの人は無造作に商品とお釣りを投げ出してくる。博物館などでも、受付の人はたいていはチケットを乱暴に破いて渡してくる。このように書いてくると、何か北京の人々の悪口を書いているようだが、そのつもりは全くない。むしろ、われわれがあまりに細かく繊細なことに気を遣いすぎているのではないか、ということを自覚させられるようになったのだ。考えてみれば、食器に多少の水垢がついていたところで気にしなければ大した問題ではないし、黄砂や柳絮が毎日のように舞っている春先の北京では丁寧に掃除や洗車をして、たちどころに汚れてしまうのがオチなのだ。多少の危険は伴うにせよ、自動車も「走ればいい」わけだ。さらに、北京の人々の名誉のためにいっておけば、大雑把に見える建築物にしても、作りはしっかりしていて機能的には何の問題もないし、スーパーや博物館での無造作な所作が、今までに何か問題を生じたことも無論ないのである。

こうした北京の人々の大雑把さは、どうやら時間の流れ方とも関係しているらしいことに最近気づいた。前回も書いたように、ズバリいって、北京の庶民の時間は、われわれよりも余裕があってゆっくり流れているのである。昼休みは一般的には二時間もあるし、その時間は昼寝をしている人が多いという。いちいち、起こりうる問題に事前に神経を遣っているわれわれとは違って、何か問題が生じたら、それから解決すればいいのだ。よく観察してみると、何もすることがないように、じっと立っているだけに見える数多の人々も、休憩をし、おしゃべりをし、トランプなどに興じつつも、それなりのペースで自分たちの仕事をしている。かくいう私も、たっぴりある休憩時間や昼休みを享受する生活に慣れ始め、同時にちょっとした埃や汚れなどは全く気にせず生活できるようになった次第なのである。

既述したことは、無論例えば北京では未だ資本主義的サービス精神が不足しているのだとか、あるいは資本主義的生活規律が確立していないのだとか、色々と説明可能であろう。だが、わたくしにとってむしろ恐ろしく感じられたのは、生活の隅々まで商品化され、管理された時間を慌ただしく生きているわれわれの生活感覚と時間感覚であった。一体いつから、われわれはあまりに細かいことに気を遣う生活や、追い立てられ休憩もろくにない時間に慣れっこになったのであろうか。

五月に入ってから、北京は急速に暖かくなり(日中で20位、時に急速にあがり30近くになることも)、また嬉しい雨も時々降るようになった。ちなみに、三月から四月にか

けては、雨はほとんど降らず、異常な乾燥状態。北京子にいわせれば、一年でも最も「不好」な月だとか。それがいよいよ終わり、北京にも新緑の美しい季節がやってきたわけである。もっともこの気候も長続きはせず、五月末には真夏の暑さがやってくるとのこと。今回は、その暑さの中から北京の大学事情などについて紹介したい。

北京通信3（2000.9 『部落』666号）

六月の北京は、梅雨もないので既に真夏の暑さだ。日中はたちまち三十五 近くまで温度が上がる。もっとも大陸性気候のせいか朝晩は比較的涼しく、湿気がそんなに感じられない点は、日本よりもやや過ごしやすいのかもしれない。それでも北京の街中で、さまざまの数の人々や、忙しく行き交う自動車・自転車・三輪車に取り囲まれると、やはりうたるとような暑さを感じざるをえない。さらに暑さに混じって時折吹きすさぶ砂埃は、やはり北京独特のもので、砂漠の中にいるような猛烈な乾きを覚えさせる。

さて、わたくしが派遣されている北京日本学研究中心は、中国教育部（日本の文部省に相当）と日本の国際交流基金が運営している日中相互理解を目的とする教育・研究機関である。淵源は日中平和友好条約締結後の日本語教育機関に遡るらしいが（当時の大平首相が訪中した際に合意されたことから大平学校の名がある）直接的には一九八〇年の日本語研修センターの設立に起源を有する官製の日本語研修、日本学教育・研究機関である。現在は、中国人日本語教師の再教育機関としての機能を果たしているほかに、言語・文学・社会・文化の四コースに分かれた日本学研究を行う大学院修士課程が置かれ、わたくしが担当しているのは大学院文化コースである。この大学院は、各コース一学年五名程度が定員で、修業年限は三年、二年間日本側派遣教員の指導を受けた後に三年次の前半は日本に留学して研究を行うことになっている。この恵まれた環境からも分かるように、中国全土から選りすぐられたエリートが集っている日本語教育、日本学研究のための英才教育機関とってよい。卒業生の多くが中国の大学の日本語教員、日本学教員として活躍している。

当然にも院生の日本語能力は申し分なく、講義・演習での会話などは、あたかも日本の学生と語っている錯覚にとられるほどだ。だが、わたくしの方とえば、実は外国人に日本学なるものを語ることに四苦八苦しているのが現実である。というのも、日本学（わたくしの場合でいえば日本史・日本思想史）というものが、実は日本国民用に内向きに構成された独りよがりなものであるか、あるいは外国人に「日本的なもの」を説明する言説であることが次第に見え透いてきて、それを外国人に「教育」することに時折苦痛すら感じるようになってくるからだ。さらに、外国人を前にするとありがちな比較文化論的視点というのものも、実は一歩間違えば安易な中国文化論、日本文化論になってしまうことにもあらためて気づかされ、思わず苦笑してしまうこともしばしばである。つまり、「日本では」「中国では」といういい方が知らずもっている固有文化論的説明が、実は文化交流どころか、互いの文化の垣根をより高くしているのではないかと、というジレンマに直面せざるをえないのだ。もっとも、このジレンマこそが、実は貴重な経験であって、「自国史」とは何かということをあらためて考える絶好の機会なのだと、今では思っているのだが。

ついでにいっておくと、北京は実は大学の街でもある。北京大学を筆頭に、中国人民大学、清華大学、北京師範大学、北京外国語大学、中央民族学院など、約六十五の大学がひしめき、学生数は十九万人にのぼる。もっとも広大な中国には約千の大学が存在すること

を思えば、その一部が北京にあるに過ぎないことになるが、学生総数は全国で約三百万人なので(十八歳人口の大学進学率は約五%)、やはり北京に修学する学生は全国一とってよく、有名大学の数も断然全国一である。また、外国からの留学生も近年増加の一途で、韓国(北朝鮮)、日本などの近隣諸国はもとより、欧米からの留学生も北京ではよく見かけられるようになったという。

こちらに来てから北京大学の学生や日本からの留学生に会う機会にも恵まれたが、ずばりいってかれらは日本の学生よりも大変熱心に勉強している。日本の学生諸君は早晚、いや既にかれらに追い抜かれている感を強くしたが、無論その責任は日本の学生にあるのではなく、教育や研究の目的・動機づけが見失われている日本社会自体にあるとつくづく感じている。

北京通信4(2000.10 『部落』667号)

七月の北京は、連日四十 近くまで気温が上がり、全くお手上げ状態だ。湿度は日本や重慶・武漢などよりは低いらしいのだが、帽子抜きで歩くことは不可能なほどに強い照り返しを浴びると、とにかく涼しい木陰を求めてしまう。よく見ると、北京子も上半身ハダカで町を闊歩しているし、木陰のいたるところで昼寝をしている。こんな時には仕事にならないと決めてしまったのか、路上に並べられた品を早々としまい込んで昼寝をしている人もいれば、運転すべきタクシーを路肩に止めて木陰で横になっている運転手の姿もある。建築ラッシュなので、北京中のどこでも存在している建築現場では、昼ともなると水揚げされたマグロの如くに横になって寝ている労働者の姿がよく見かけられる。とにかく、皆暑いのだ。

そして、夏になると際だつのが、北京の人々の貧富の差だ。片側には、冷房の完備された現代建築や完全冷房の高級車があるかと思えば、片側には冷房はおろか扇風機とも無縁なおびたしい庶民の世界がある。実は、こんな暑い日に外でハダカになっているのは、例外なく貧しい人々で、少数の金持ちはクーラーの効いた室内か車の中にいるに違いないのだ。さもなければ、北京の街を歩いているのは、時期を間違った外国人観光客と相場は決まっている。

そして、正直いって、この中国で見つめてきたものの一つは、この貧富の差だ。北京などはまだ相対的にははるかに豊かな方で、周辺の農村に行くと、ただちに昔ながらの貧しい生活をしている人々に出会うこととなる。例えば、五月にメーデー休暇を利用して、山西省五台山方面の観光に出かけたのだが、いわゆる観光コースとは異なった道路を通ったため、車窓からメーデー休暇とは全く無関係という感じで忙しく働いているお百姓さんの姿をちょくちょく見かけた。それも、この数百年来変わってはいないのではないかとさえ思われるような、牛馬と鋤を用いての重労働に懸命に従事している姿には、さすがに驚かされた。乾燥のためか干上がってしまっているように見える畑を、牛馬を用いて懸命に耕している人々、さらに利用できる土地が限られているためか河原近くだけに整然と造られている畑などを観察しながらしばらく行くと、今度は赤茶けた煉瓦を積んだだけの建物が寄せ合ってきた農村が広がってくる。停車して、しばらく休憩してみるならば、この農村では水道も完備していなくて、ましてトイレも穴だけ開けただけの共同トイレであることに気づかされる。路上には、ハダカ同然の姿で遊んでいる子供たち、おしゃべりをしな

がら農具などを整理している婦人・お年寄りの姿がある。かれらが、昔ながらの素朴な生活を送っていることも、一目瞭然だ。そして、あまり車が通らない農村で行き違うのは、多くは真っ黒くなっている炭鉱労働者や、山西省が全国一の埋蔵量を誇る石炭をこぼれるばかりに満載しているトラックだ。これらの人々も(労働者・農民!)、メーデー休暇とは無関係な忙しい生活を送っていることを考えると、何かメーデー休暇に休んで観光していること自体が、きわめて皮肉な行為に思えてくる。

念のためいえば、山西省は鉱物資源も多く、重工業が発展している地域の一つで、決して相対的に貧しい省ではない。そして、われわれが訪ねた大同の雲崗石窟、懸空寺、五台山などが、主として中国の観光客でごった返しているのも事実で、そこにはカメラやビデオを手に、一人っ子を抱いてメーデー休暇を楽しんでいる多くの中国の人々の姿がある。要するに、改革・開放政策の恩恵に浴している人々と、そうではない人々の格差がだれの目にも明らかになってきているのだ。

この中国で見た貧富の差こそは、現代資本主義が全世界で何を行っているのかを如実に物語るものなのだろう。その意味では、それは決して他人事ではすまされない問題なのだ。

以上、わずか半年という限られた滞在ではあったが、観光だけでは触れられない現代中国の姿の一端について、思うところを正直に書きつづった次第である。

北京で「民族」について考えたこと(2000.11 『部落』668号)

今年の二月から七月まで、たった六ヶ月弱ではあるが北京に滞在する経験を得た。たった六ヶ月弱とはいえ、日本の国境の外にいと、やはり日々「民族」=「帰属国籍」(以下、小論ではエスニックな意味よりも、「帰属国籍」という面を主要には意識しながら、「民族」の概念を用いる。両者は異なるものだという議論があることは承知しているが、わたくしは、「民族」意識が直ちに「帰属国籍」意識と重なるところに現代の「民族」問題の特色があると考えているので、この点をご容赦願いたい)というものについて見つめさせられ、また普段は日本でさほど意識していないにも拘わらず、自分がズブズブの日本人でしかないことを自覚させられた。人と人との出会いの全てにおいて、常に日本人・中国人という記号がつきまとい、会話の多くが「日本では~」「中国では~」という形式に落ち着くことになるのは、予想していたとはいえ、やはり苦々しい体験であった。そういえば、日本では少数派に違いない外国人に出会うたびに、わたくしも「~人としてどうですか」「~ではどうですか」という発言を無自覚的に繰り返してきたのだということに、逆の立場になって初めて気づかされた。「想像の共同体」としての「帰属国籍」意識は、国境の内部では「自然化」されているが、国境の外部に出ると拭っても拭いされないシミのようなものとして想起させられ、かくて実体化していくものなのだという事にあらためて気づかされた次第であった。

それどころか、国境の外にいることは、かえって内部性を喚起し、日本というものの固有性に「目覚めた」実例が多々あることが、ふと頭をよぎったのも事実であった。たとえば、明治の国粹主義的哲学者であった井上哲次郎は、ドイツで中国人と間違われたことに憤激して、オリエンタリストとして、そしてナショナリストとしての自覚を強めたのであり、あるいは倫理学者の和辻哲郎、国粹主義的歴史学者の平泉澄、さらには戦後の日本文化論者・政治学者に至るまで、多くは国境の外に出て実は「立派な」ナショナリストとなったのであった。そして、それは現代においても大きく変わっていないという思いに、わたくしはしばしばとらわれた。管見の限りでは、中国での居住日本人の多くは（わたくしが出会ったのは研究者、ビジネスマン、外交官、旅行業者などであるが）、中国の「後進性」や「意外な」他者性にときに満足し、ときに憤慨し、固有日本文化を「発見」したりしている。「日本ではこんなことは考えられない」という声は、しばしば聞かれた不満であり、また正直いってわたくしもそうした思いを抱いたことがあった。無論、中国の近代化のスピードは尋常なものではなく、急速に日本と似た状況になりつつあるのも事実である。ただし、わたくしがこのように述べたこと自体に凶らずも明白なように、中国の状況をみる視線は、常に日本や欧米との比較に支えられており、それがいかに不可避的なものであったとしても、帰るところ「日本ではこんなことは考えられない」「日本に近くなってきた」という意識になっていくのである。それが直ちに、排外的なナショナリズムにつながるものではないという楽天的な見方もできるだろう。だが、ここでこうしたことを紹介したのも、国境の外にいることが、多くの場合は「自国」との比較という視線を生みだし、なかには「日本人であってよかった」という意識を生産していくものだということに注意を喚起したかったからである。海外滞在者は、もう少しインターナショナルなものかと思っていたが、しばしば「日本を代表している」という意識を背負ったナショナリストになっていくということを、あらためて発見したのであった。そして、それは決して他人事ではなく、国境の外にいることが、実は国境の内側以上に自覚的に「自国」意識を生み出すものなのだという経験に自ら自身が直面させられたことは、正直いって衝撃的だった。

さらに、中国といえば、絶対に避けて通れない問題として戦争責任の問題がある。わたくしが日本人であるということは、直ちに中国侵略を行い南京大虐殺などの蛮行を行った日本に「帰属する」日本人ということを意味している。無論、しばしば指摘されているように、中国でも若い世代になると日本といえばハイテク技術・テレビゲーム・テレビドラマ・マンガを想起するようであり、必ずしも日本人=かつての侵略者という見方が一般的ではなくなっているようである。しかしながら、わたくしが北京や中国各地を旅行しなが

から見学してきた史跡は、古代文化の史跡ばかりではなく、否応なしに近代の日本の侵略に関わる史跡にならざるをえなかった。ついでにしておくならば、日本からのパック旅行の多くは、古代文化の史跡や中国の自然公園を無理に選択して構成されているものなのだという事も痛感させられた。それは、日中戦争を意図的に忌避して構成された観光ツアーになりがちであり、日本人の多くが近代以前の文化・文明で中国イメージを形づくることに間違いなく貢献している。したがって、観光ツアーなどで毎年多数の日本人が中国を訪ねているにも拘わらず、なかなか戦争の傷跡に直面することがないように「配慮」されているツアーが多いように感じられた。だが、各地を自由に旅行するならば、史跡の多くが実は抗日戦争や中国革命に関わるものであって、そうした場所のほとんどは中国の「愛国主義教育基地」として、毎日のように児童・生徒が見学する場所となっていることが理解される。そして、そうした場所では、当然ながら日本の戦争責任の問題を直視させられることとなる。だがここで述べておきたいのは、その際にもふと気づくのは、いつのまにか自分が、日本を代表している者であるかのように意識していることであり、戦争責任の問題について前向きに対処しようとするほど、いつのまにか「立派な」日本人論に帰結してしまっていることである。誤解のないためにいえば、わたくしは日本の戦争責任を徹底的に明らかにし、中国や韓国の個人に対して日本政府が個人賠償を行うべきだと考えている。また、中国の院生に対する講義でも、近代日本の侵略についてできるだけその歴史的経緯が明らかになるような講義を行ったつもりである。しかしながら、(加藤典洋らの如くに)戦争責任を考えるためには、まず責任主体としての「立派な」日本人となるべきだという主張には多大な疑問がある。近代日本の侵略が帝国主義的な侵略であったことは自明であるとしても、それが強烈な排外主義的なナショナリズムをともなって推進されたことを直視するならば、「正しい」ナショナリズムという主張は、どうしても「甘い罠」と考えざるをえない。「自国」ナショナリズムと解体的に向き合うことで、初めて他者のナショナリズムとも解体的に出会えるという晩年の宮崎滔天の主張は、戦争責任の問題を直視するためにも重要だと、中国であらためて考えさせられた次第である。

ところで、わたくしは日本文化史・日本思想史について中国の院生に講義するために日本学研究センターに派遣されたのであったが、文化交流や比較文化というものも、その高遠な理想とは逆に固定的な一国文化論を立ち上げ、かくてかえってお互いの違いの確認に終わっているのではないかという思いに何度もとらわれた。

いうまでもないことだが、中国の院生諸君は、わたくしの講義から日本文化・日本思想の特質が語られることを期待していた。かれらは、徳川時代の文化や思想というものが、

どのような点で日本的なのか、それが語られることを期待しているのである。無論、これまでの日本文化史や日本思想史という学問が、その点について縷々と説明するものであることは否定すべくもないことであり、日本思想史に限ってみても、津田左右吉、和辻哲郎、さらに丸山真男といった著名な研究者たちの言説は、主要には中国や西欧との比較によって日本思想の特質を説明しようとしたものであった。だからこそ、わたくしはまず講義の冒頭で日本文化・日本思想というものが、日本文化論・日本思想論としてしか存在していないものだということを、中国文化・中国思想も同様のものであることを暗に意識しながら語った。つまり、日本文化・日本思想というものは、自明な実体として存在しているのではなく、それをそのように見る言説として、換言するならば近代のナショナリズムと不可分のものとして存在していることに注意を喚起したわけである。すなわち、日本列島上での文化・思想は無論歴史的に形成・存在してきたものであるが、金閣寺が近代に入ってから日本の文化財・国宝になったように、さまざまな思想も学問的な言説によって初めて日本思想と捉えられるようになったことを強調したわけである。それを強調したのは、一つには徳川時代における思想家の多くが自らの思想を日本思想として把握していないという単純な事実を述べたかったことに加えて（いうまでもなく徳川時代には、日本国は存在していない）あらかじめ日本文化・日本思想を実体的に固定し、同時に中国文化・中国思想も実体的に固定し、その上で日本的特質・中国的特質を云々するような講義を避けたかったからである。悪名高い日本文化論を、まさか中国で行うわけにはいかないと思っていたのである。

だが、わたくしのこの目論見は、講義が進行するにつれ、しだいにあやふやなものになっていった。中国の院生、ことに徳川時代から明治時代の日本文化・日本思想に関心を示す院生は、ほとんど例外なく日本の近代化に関心を寄せており、その文化的・思想的背景を述べてほしいといわれると、どうしても日本文化・日本思想の展開の特質という問題に直面させられる。何とか、日本列島上での文化・思想をできるだけ日本的云々ということに帰結しないように説明し、かつ中国の文化・思想も決して中国的なものとして存在しているのではなく、両者は一つの文化圏・思想圏の出来事として存在していたということを説明するように心がけたのであるが、それとてどれほど固有文化論から自由なものであったか、今となってははなはだ心もとない。

要するに、わたくしが中国で痛感させられたのは、さまざまな出会いから学問に至るまで、「帰属国籍」でレッテル貼りされた見方が心底染みついているということであり、あたかも人が男の人・女の人としてしか存在しえないかの如くに、人は「～国人」として存在



し、文化や思想は「～国の文化」「～国の思想」として存在しているかの如くに観念されている現実であった。無論、そのことを否定的にのみ捉えるべきではないという議論もあるだろうし、「民族」というものが簡単に止揚しえないように、「帰属国籍」というものも簡単に解体されないものであってみれば、それを受け入れた上で試行錯誤を始めるしかないことは承知している。そして、「帰属国籍」意識にとらわれない人と人との平等な出会いとは、こうしたギリギリの所からいかに新しい立脚点を見いだすのかということからしか始まらないことも。しかしながら、そこでも重要なのは、居直りに「民族」「帰属国籍」を強化することに参加することではなく、やはりそれと解体的に向き合うことなのではなかろうか。そのことが自己自身にとってもいかに困難なことであるかは、それこそ中国で体験し続けたことであったが、さしあたりは日本史・日本思想史という学問的言説の中に孕まれたナショナリズムとどのように解体的に向き合えるのか、帰国した今はそのことを真剣に問いたいと思っている。